

# 経済活動の障碍 深刻な治安問題

菅野 道孝

日本企業による海外展開が進み、海外の至るところで日本のビジネスマンの姿を目にする。ラテンアメリカにおいても、メキシコやブラジルと言った大国のみならず、中堅国であるコロンビア、ペルー、チリといった国々においても複数人駐在員を置く企業も増えてきた。日本人の海外駐在員の数が増えている一方で、駐在員が拘りや窃盗から強盗に至るまで、何らかの犯罪に巻き込まれるケースも増加の傾向にある。添付の図にて分かるとおり、ラテンアメリカの中では特に、ベネズエラ、コロンビアからグアテマラにかけて中米一帯の治安には注意が必要だ。弊社は、現在、この地域ではベネズエラ、コロンビアとコスタリカに現地法人事務所を構えている。以下にラテンアメリカにおける、日本人駐在員が巻き込まれた幾つかの事例と治安対策の経験とノウハウの紹介を本稿の目的とする。

## 空港内は最も注意が必要なポイントの1つ

先ず、訪問者の最初の到着地である国際空港内は最も注意が必要なポイントの1つである。次に、実際にメキシコであったケースを紹介する。

メキシコ空港に到着した日本からの出張者が荷物受け取り後、ゲートを出た所で、近くの両替所へ向かった。両替後、空港から市内へ向かう道中、強盗グループの車の待ち伏せに遭い、換金したばかりの現金を強奪された。この背景には、強盗側に2つのグループが存在したことがその後の調べで判明した。すなわち、空港内にて出張者が換金する様子を監視するグループ、そして路上で待ち伏せするグループである。前者が大量の現金を換金しているようなターゲットを特定し、後者グループへ詳細を連絡していたのである。原則、弊社では、ラテンアメリカの空港内での両替は、差し控えるようにしている。

次にアルゼンチンでの一例を紹介したい。

弊社出張者2名がブエノスアイレスの街中を昼間歩いており、とある交差点に差し掛かったところで、突然、うち1人の出張者の袖口に液体のようなものを降りかけられた。慌てて、本人が袖口を確認すると、その液体は黄色のマスタードであった。幸いにも、所持品の盗難等の被害を被ることはなかった。この場合、2

名で行動していたことが功を奏したと言え、単独であったならば、付着したマスタードに注意を奪われ、所持品の盗難に遭っていただろうと推測される。

## ベネズエラ市中での強盗・誘拐

著者が駐在経験のあるベネズエラでは、こうした例を取り上げれば枚挙に暇が無い。

ここでいくつか紹介したい。

(1) 午後7時頃、マイケティア国際空港に到着した日本人旅行者(男性)(以下「被害者」)が国内線のチケットを購入するために空港内を歩いていたところ、35歳位の男が片言の英語で国内線のチケットの購入を手伝う旨声を掛けてきた。その後、男は拳銃を持っている旨告げ、被害者に車(黒色、セダン)に乗るように言った。被害者が車に乗ったところ、別の男2名(25歳位、もう1名は年齢不詳)が乗っており、所持品をすべて渡すように脅されたことから、身の危険を感じた被害者は現金、クレジットカード、パソコン、デジタルカメラ等を渡した。その後、被害者は犯人の車でATMへ連れて行かれ、クレジットカードで現金を引き出させられた後、午後11時頃に被害者は犯人の車でカラカス市のセントロ地区まで連れて行かれ、解放された。被害者に怪我はなかった。奪われたクレジットカードから数回に渡り、合計数十万円が引き出されていることが判明した。

(2) 弊社出張者が1人でカラカス市内のホテルに滞在し、夕食に出掛けた。すでに時間も遅く、照明も少ない暗闇の中を歩いていたところ、突然、鈍器なようなもので頭部を殴りつけられ、1時間程路上で倒れたまま、気を失ってしまった。ベネズエラのように、外務省から訪問について注意喚起が出ているような国では、夜間の1人外出は絶対に避けなければならない。止む無く夜間外出をしなければいけない場合は、複数人で街灯照明がある箇所を通るようにするか、車での外出を徹底する必要がある。

(3) 出張者2名が空港からタクシーにて、宿泊するカラカスのホテルに到着し、カウンターにて宿泊手続きを行っていた。すると突然、ホテル入口近辺が騒がしくなり、誰かしらが、「銃を持った人間が侵入した!」

と叫んだ。続いて、拳銃を持ったと思われる男が、カウンターへ走って近づいたものの、周囲の人間に取り押さえられ、幸いなことに負傷者は出なかった。後の警察の情報によれば、強盗のターゲットは出張者の1名だったとのことで、当日その出張者は高価なスーツ、腕時計、ピカピカに磨かれた靴を履いており、明らかにお金持ちの印象を外部に与えていたようである。

(4) 弊社ローカル社員が、外国人出張者3人が泊まっていたカラカスのホテルに、朝6時半に社用車でピックアップし、ベネズエラ内陸のバレンシアへ向け出発した。6時50分頃プラサ・ベネズエラ近くの混雑している交差点で信号待ちをしていたところ、2人の拳銃強盗に襲われた。前後に信号待ちの車があるため、動きが取れないところに、1人が車の真正面・至近距離から拳銃を構え、もう1人が運転手の脇から大声で「窓を開けないと撃つぞ!」と脅した。運転手が窓ガラスを降ろしたところ、強盗は、腕時計・指輪を要求した。我々が時計・指輪を渡すとすぐ1分程の間に逃げ去ったが、もし発砲されていたら車内の誰かが死んでいた状況である。この様な場合には、決して抵抗せず、また強盗を刺激せず、要求されたものを渡す事で安全を確保する必要がある。この件での被害は、運転手：指輪、出張者A：腕時計と指輪、出張者B：指輪、出張者C：腕時計であった。

(5) 午後9時頃カラカス市内のレストランで食事を終え、帰宅途中の高速道路入口で不審な車2台に同企業社用車(防弾車)の前後を挟まれた。前方で急に停車した車より覆面をした犯人4名が車から降り、うち2人がいきなり運転手側の窓に向け、拳銃を10発程発砲、同社用車の天井を数回殴打し、降車するよう要求された。身の危険を感じた同運転手は自ら運転手席のドアを開けたところ、犯人に車外へ引きずり出され銃器で頭部を数回殴打され、犯人の車に乗せられた。また、同社用車には別の犯人2名が乗り込み、駐在員2名を乗せたままカラカス市のセントロ地区方面へ向かった。途中、犯人2名から要求され駐在員から被害品である現金を渡したが、そのままセントロ地区方面へ犯人の車及び社用車の2台で連行された。午後9時30分頃、同セントロ地区の民家駐車場で駐在員は犯人の車(ピックアップトラック)に乗り換え後、同乗していた犯人のリーダー格の人物から「誘拐」である事を伝えられ35万米ドルの要求があり、別の場所へ犯人の車で移動した。移動中、犯人達は中国人の麻薬組織関係者と同被害者達を混同しているとの言動があり、被害者

が日本人だとわかると、今度は「日本円を出せ」と要求してきたが、最終的には犯人達より「自分たちは警察官だ。我々は中国人の麻薬関係の人間を探していたが誘拐する相手を間違えた。申し訳ない。」と伝えられ、セントロ地区の別の場所で駐在員を解放した。社用車も別の犯人によって既に解放場所に移動されていた。この「自分たちは警察官」、「中国人麻薬組織関係者」という犯人の発言の真意は不明であり、単なる言い訳の可能性も多分にあり、また計画性があったかどうか不明である。なお、犯人は現金以外の所持品(携帯電話、クレジットカード等)には関心を示さなかった。なお、同被害車両の数台後方には同社の別の社用車が走行中であつたが、事件には気がつかなかったようである。本被害者の駐在員によると犯人は20歳代のベネズエラ人の様相であり、全部で6~7名いたと思われるとのこと。本件被害者の運転手の証言によると事件発生時、高速道路の後方は車が渋滞しており、皆本事件を車から降りて見ていた。

#### 大切な留意点

以上の数々のケースから、ラテンアメリカで企業活動を行ううえで、主に下記3点を考慮しておくことが大切だ。

- 「用心を怠らない」… 単独行動を避けるとともに、常に周囲の状況に注意しながら行動する。無警戒に行動すると誘拐犯に狙われるおそれがある。
- 「行動を察知されない」… 毎日同じ行動(経路や時間帯)を取ると相手側に犯行に及びやすい場所で待ち伏せ等されるので、パターンを変えた行動をとることが大切である。
- 「目立たない」… 派手な衣装や高価な装飾品、バッグ等を持ち歩くのは危険である。腕時計等も、日本人は高価な腕時計をしているというイメージを持たれているので、身につけるのは危険である。

冒頭でも触れたように日本企業のラテンアメリカへの進出は著しく、拡大を続けている。駐在員が駐在先で危険にさらされているのは、元も子もない。駐在員はある程度、自分の身は自分で守るという自覚が必要だ。弊社では、現地各国の大使館・日系企業連盟の緊急連絡網を現地安全対策の基本と捉えている。加えて、ラテンアメリカへ進出してから50年以上の歴史と諸先輩方の経験・知恵を拝借しながら、現地での安全な経営オペレーションを継続させていく。

(かんの みちたか 前川製作所グローバル販売ブロック主任)